『荘子』を通じて読む「売茶口占十二首」

馬　　叢　　慧

目　次

1、はじめに
2、「売茶口占十二首」
3、終わりに

1、はじめに

売茶翁（1675-1763年）は、日本における煎茶や煎茶道の「中興の祖」と呼ばれ、『近世畸人傳』[1]にも登場する人物である。売茶翁は肥前国蓮池[2]の人で、11歳で蓮池の龍津寺に入門し、法名は月海であった。46歳まで黄檗僧として修行に励み、寺務に勤め、龍津寺の住職にもなれる立場であったが、その後、安逸な禅僧生活を捨て、京都の街中で煎茶を売り歩き始めたことから、売茶翁と呼ばれるようになった。

売茶翁は京都で売茶生活を始めてから亡くなるまでに、百首近い漢詩を残している。そのほとんどが、『賣茶翁偈語』（1763年）に収録されている。これらは、売茶翁を研究する上で、非常に重要な資料である。

従来、売茶翁の詩作は、ほとんど仏教書、特に禅宗の経典によって解釈されており、福山暁菴の『賣茶翁』（1936年）、『江戸漢詩選第五巻　僧門』（1996年）、『売茶翁偈語　訳注』（2013年）がその代表的なものである。しかし、淡川康一氏が「「賣茶翁偈語」平解」で、「翁の詩の中に、荘子の故事にふれた個所が多いのは、本書を読まれるかたの気づかれるところであろう」[3]と述べたように、売茶翁の漢詩には荘子からの出典と思われる内容が多数含まれている。その一方で売茶翁の詩は、諸研究により解釈が加えられているものの、実際に荘子に触れた記述には深い考察がなされていないのが現状である。

「売茶口占十二首」は、題名の通り、十二首の漢詩からなり、売茶翁が京都で茶を売り始めた頃の作品と思われる。その中には、売茶翁の茶に対する姿勢や、様々な思いが込められており、禅僧から売茶の老翁に変わった自分の思いについて、また、世俗に隠居するという意志などが詩に示されている。本稿では主に「荘子」を通じて、「売茶口占十二首」を解釈し、売茶翁の荘子理解について検討を試みたい。

2、「売茶口占十二首」

「口占」とは、詩に草稿を作らず、直ちに口ずさむという意味である。「売茶口占十二首」は、すべてが七言律詩であり、十二首からなる。これに対して、売茶翁の法弟である大潮禅師[4]は「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」を次韻として作詩している。

「売茶口占十二首」が作られた年代は不明であるが、その内容から売茶翁が京都に住居を定め、茶を売り始めた頃だと思われる。『江戸漢詩選第五巻　僧門』でも、大潮の「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」（1738年頃）の作成年代から、売茶翁が京都で茶を売り始めて間もない頃（1735年頃）の作品であると推定している。これは、大潮の次韻「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」が収録されている『魯寮詩偈』の年代順からも推測される。

第一首

将謂傳宗振祖風	将に謂えり、宗を伝え祖風を振うとし
却堪作箇賣茶翁	却って堪えて、箇の売茶の翁となる
都来榮辱亦何管	都来の栄辱、亦た何ぞ管せん
收拾茶錢賑我窮[5]	茶銭を収拾し、我が窮を賑わす

「禅宗を伝え、開祖の教えを賑わせようと思っていたが、逆に売茶する翁になってしまった。すべて

の栄辱にどうしてとらわれようか。茶代を集めて、私の困窮に充てている。」

将謂は思い違いの意味。宋の程顥の詩「春日偶成」にある「時人不識余心楽、将謂偸閑学少年」の中でも、同じ思い違いの「将謂」が使われているが、ここで思い違いしている人は売茶翁自身であったろうか、他人であったろうかが興味深い。「傳宗」は、宗を伝える。「祖風」は、祖師の禅風。「都来」はすべて、完全の意味。唐の羅隠の「晩眺」には「天如鏡面都来静、地似人心総不平」とある。「榮辱」は栄耀と恥。「亦何」は「どうして…だろうか」の意で、「管」は気にする。「都来榮辱亦何管」はすべての栄辱をどうして気にするのだろうか、つまり気にしないという意味である。「賑」は救済するという意味。

これは「売茶口占十二首」の第一首目として、売茶翁の決心を表す詩である。第一、二句の「将に謂えり、宗を伝え祖風を振うとし、却って堪えて、箇の売茶の翁となる」では、黄檗僧時代の売茶翁の志は禅宗を広めることであったが、今はただ一人の茶売りの老翁になってしまったという。

第三句「都来の栄辱、亦た何ぞ管せん」は、すべての栄耀と恥を気にしない、という意味であるが、売茶翁の言う「すべての栄耀と恥辱」は何を指すのだろうか。売茶翁が望めさえすれば、少年時代から修行していた龍津寺の住職となることも不可能ではなかった。僧侶として寺院の住職になるのは、世間一般からすれば栄耀である。

それなのに、売茶翁は自身の作品『對客言志』の中で「売茶は児女独夫の所業にして、世の最も賤する所なり」と述べ、茶を売ることが最も卑しいということを承知で、住職の名誉を棄てて卑しい茶売りを選んでいる。このことは世間一般的な価値観からしてみれば、まさに「恥」と言えよう。しかし、同じ『對客言志』では「人の賤する所我れこれを貴とす、即吾が吾れを快しとする所以の者なり」とあり、売茶翁は、あえて人が卑しいとすることを自分は貴いとし、自分のやることを快いことにするというのである。つまり、名誉とされる「住職」を棄て、恥ずかしいとされる「売茶」を選ぶという、世間一般的な価値観に反する選択をしたのである。一見自分を卑下しているように見えるが、三句と四句において売茶についての強い意志が表現されており、この売茶翁の反俗・脱俗的な思想こそは荘子に基づくものと言えるであろう。

第二首

茶亭新啓鴨河濱　茶亭新たに啓く、鴨河の濱
坐客悠然忘主賓　坐客悠然と主賓を忘れる
一盌頓醒長夜睡　一盌頓に醒む、長夜の睡
覺来知是舊時人　覚め来たりて知る、是旧時の人

「鴨川のほとりに新しく開いた茶店では、客も悠然として主賓の立場を忘れてしまう。一杯の茶で直ちに長い眠りから目を覚まし、目覚めて以前のままの自分であることを悟る。」

ここでの茶亭は、売茶翁が鴨川の川辺に開いた「通仙亭」のことを示している。同じ「売茶口占十二首」十一首にも「通仙亭上也無虧」とある。「新たに」と表現していることからも、1735 年以降のことになる。

そして第二句において主賓とは、一般的に主人と客の意味であるが、『江戸漢詩選第五巻　僧門』では、「主観と客観の対立」[6] を示すとされ、また、「忘主賓」については、「忘主賓でそのような対立を超えて一体となった境地を言う。」[7] と説明されている。また、「坐客悠然忘主賓」全体についても、「『荘子』大宗師篇に出る「坐忘」（無意識裡に天地と我とが一体となる境地）を念頭に置く。」[8] とのみ解釈されている。

ここで「坐忘」についてさらに深く考察してみたい。『荘子・大宗師篇』には、「它日復見曰、回益矣、曰、何謂也、曰、回坐忘矣、仲尼蹙然曰、何謂坐忘、顔回曰、墮枝體黜聰明、離形去知、同於大通、此謂坐忘」とある。これは孔子と顔回が「坐忘」について対話する形を通じて、「坐忘」とは「自分の身体や手足の存在を忘れ去り、目や耳のはたらきをなくし、形のある肉体を離れ、心の知を捨て去り、あらゆる差別を超えた大道に同化すること」[9] を示すとされる。福永光司氏はこの「坐忘」について、「荘子は孔門のスローガンである仁義礼楽を哂いながら、超越者の世界が一切の人間的な営みの矮小さを超えるところに成り立つことを強調しているのである」[10] と解釈している。また、森三樹三郎氏は、「荘子の坐忘が、はたして坐禅のような修行としてあったかどうかは

疑わしい。『荘子』全体を通じて、無為自然に至るための修行法は、まったくといってよいほど説かれていない。むしろ修行とか努力といったことは、不自然な人為として排斥されるものであったと考えられる。したがって坐忘というのも、いっさいの差別を忘れ去る境地を、象徴的に表現したことばとみてよいであろう。」[11] と「坐忘」と「坐禅」の違いについて区別した。つまり、坐忘は坐禅と異なり、人為的な行為を排除し、いっさいの差別や自我を忘れ去る境地を示したものだと言えよう。

そのように考えると、「主賓」は単なる茶亭における主と客という両者でとらえるのでは不十分なことに思い至る。禅語には、「賓主歴然」という言葉があり、これは『臨済録』の「上堂」の「是日兩堂首座相見、同時下喝。僧問師、還有賓主也無。師云、賓主歴然。師云、大衆要會臨濟賓主句、問取堂中二首座。便下座。」という話に由来している。つまり、二人の高僧が同時に互いに「喝」を放ったことに対して、ある僧が師に対して、両者の間には賓と主とが区別しないのかと聞いたところ、師は賓主の区別は明確だと答えたものである。「真の一喝は、無位の真人の最も端的直接な働きであり、従って本来一味平等であるべきもの、その間に主客の差別などあろうわけはない。しかし、真の平等はまたただちに差別で、そこに歴然たる主客の区別が存しなければならないことをいう。」[12] のである。

再び、「坐客悠然忘主賓」を考えると、表面的には「茶亭の客も悠然として、主人と客の立場を忘れてしまう」という意味であるが、これまでの解釈を加えると、売茶翁は自分の通仙亭において、喫茶を通じて、主体や客体、つまり形のある肉体を離れ、心の知を捨て去り、あらゆる差別を超えた大道に同化するという、まさに荘子の「坐忘」の境地の実践を強く意識していたことがわかる。

そして、第三句の「長夜」は、長い夜を示すが、仏教用語では煩悩により悟りが開けていない境地を例えて使う語句である。例えば生死長夜や無明長夜などであるが、『成唯識論』[13] 七には、「未得真覚、恒処夢中、故仏説為生死長夜」とある。これは「いまだ真覚（さとり）を得ずして、常に夢の中に処す。故に仏は説いて、生死長夜となす」と生死に迷い苦しむさまを長い夜の眠りにたとえているのである。

第四句の「舊時人」の舊時は、昔や古い時の意味である。『後漢書』「光武十王　東平憲王蒼傳」にも、「三年、帝饗衛士於南宮、因從皇太后、周行掖庭池閣、乃閲陰太后舊時衣服、愴然動容。」とある。先述の『賣茶翁』（1934 年）では、「悟っても人には別に変りなき意、普燈に云く只舊時の相を改めて、舊時の人を改めずと、又曹山云くただ是れ舊時の人、舊時の路を行かずと。」[14] と解釈がある。また、『江戸漢詩選第五巻　僧門』においては、「舊時人」について「禅語。むかしのままの存在。覚醒以前と変わらない自己のあり方。それがそのまま本来の自己。」[15]、『売茶翁偈語訳注』においては、「もとのままの自分自身」[16] と解釈している。

売茶翁は、三、四句目で、一杯のお茶を飲むと、すぐに長い眠りから目が覚めて、自分が昔のままであると悟った、と表現しているがこれはどのようなことを示しているのであろうか。

筆者はここでの表現を、荘子の「胡蝶の夢」を連想させる句であると考える。『荘子・斉物篇』には次のようにある。

「昔者荘周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喩適志与、不知周也、俄然覚、則蘧蘧然周也、不知、周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与、周与胡蝶、則必有分矣、此之謂物化」

「昔荘周は、夢に胡蝶と為れり。栩栩然と胡蝶なり。自ら喩しみて志に適えるかな。周たるを知らざるなり。俄然にして覚むれば、蘧蘧然く周なり。周の夢に胡蝶と為るか、胡蝶の夢に周と為るかを知らず。周と胡蝶とは則ち必ず分有り。此を之れ物化と謂う。」

これは、荘子こと荘周が、自分が胡蝶になった夢を見るという大変有名な話である。簡単に述べれば、夢で蝶となった荘子は、自分が荘子であることを忘れていたが、目が覚めるとやはり荘子であった。荘子が夢で蝶となったのか、蝶が夢で荘子になっていたかはわからないが、荘子自身でありながら、両者は異なる形のものである。そのようなことを「物化」と呼ぶというものである。

「すべてをひとしいとみる立場からみれば、自分と他者との区別がないのであるから、胡蝶はそのまま荘周である。したがって、どのような変化がおと

ずれても、自分が失われることはない。生きている自分があるとともに、死んでいる自分がある。人生だけを現実とみるのは差別の立場であり、人生もまた夢と見るのが無差別の立場である。なぜなら、万物斉同の理においては、夢と現実との区別はないからである」。[17]

この第二首においても、突然夢から目覚めて、胡蝶ではなく、荘子であることに気付いたと同様に、売茶翁は喫茶を通じて、自分自身も以前の自分であることに気づくとしたことに共通点が見られる。胡蝶は荘子であり、荘子もまた胡蝶であるように本質的には変化していない。売茶翁は今の自分も自分自身であり、昔の自分も変わらぬ自分であると表現しているのである。

ちなみに売茶翁の別の詩である『試越渓新茶』においては、「荘周何暇化胡蝶、胸宇灑然物外人」とあるように、喫茶と胡蝶の夢とを対照していることで、悟りに近い境地を求める売茶翁が荘子を強く意識していたことがうかがえる。

これまで示した様に、もし売茶翁が第二首において、「坐忘」と「胡蝶の夢」というイメージを含んで作詩していたとするならば、売茶翁の荘子に対する意識は相当に強く、同時にこの詩に込められたメッセージも深いものと考えざるを得ない。つまり、売茶翁は喫茶を通じて、肢体や是非など、あらゆる差別を忘れるという坐忘の境地に至るとともに、さらには胡蝶の夢に見られるような、自由自在に物化の世界で敖遊するという、荘子が至高とする生き方に至ることができることを主張した詩であったと言えよう。

第三首

頻喚喫茶効趙州　頻りに喫茶を喚び、趙州に効う
千年滞貨没人求　千年の滞貨、求る人なし
若能一口喫過去　若し能く一口に喫過き去られば
萬劫渇心直下休　萬劫の渇心、直下に休す

「喫茶をしきりに叫んで、趙州和尚を真似する。長い間の売れ残りを欲しがる人もいない。もし一杯のお茶を飲めば、長い間の心の渇きもたちまち癒してしまう」

「趙州」は趙州禅師のこと。中国唐末の禅僧であり、その禅語「喫茶去」は広く知られている。『趙州録』巻下に「師問二新到、上座曾到此間否。云、不曾到。師云、喫茶去。又問那一人、曾到此間否。云、曾到。師云、喫茶去。院主問、和尚、不曾到、教伊喫茶去即且置、曾到、為什麼教伊喫茶去。師云、院主。院主應諾。師云、喫茶去。」とあり、「師、二りの新到に問う、「上座、曾て此間に到るや。」云く、「かつて到らず。」師云く、「茶を喫し去れ。」又た那の一人に問う、「曾て此間に到るや。」云く、「曾て到る。」師云く、「茶を喫し去れ。」院主問う、「和尚、曾て到らざるに伊をして茶を喫し去らしむるは、即ち且らく置く。曾て到るに、什麼としてか伊をして茶を喫し去らしむる。」師云く、「院主。」院主応諾す。師云く、「茶を喫し去れ。」」である。これは、新到も久参も、一杯のお茶が無心に飲めたら、そのとき一生参学の事はおわるのである。[18]

売茶翁は一句目で、「頻りに喫茶を喚び、趙州に効う」とはっきりと目指したものが趙州のような茶であることを示し、地位や経験など、世間一般的に重視されるもののすべてを忘れて、無心で茶を飲めば、これこそ一生参学に同等するほどの茶であるとしたのである。

「千年滞貨」は、いつまでも売れ残っているもの。『賣茶翁』(1934 年) では、「抱朴子に云く和碧変じて滞貨となると、禅門には未了の公案に喩ふること多し。虚堂録云く千年の滞貨行はれず、重ねて新たに價ひを増すと、今は前掲の趙州喫茶去の話を指すか。」[19] とある。『江戸漢詩選第五巻　僧門』では、「『碧厳録』[20] 十二則・本則評唱に「五祖先師頌して云く、賤売の担板漢、麻三斤を貼秤するも、千百年の滞貨、渾身を著く処なし」」[21] と出典について解釈した。宋・釈慧空禅師の詩『泐潭暹上人出示延福頌古三首索鄙語因用其韻贈之』に「千年滞貨無人顧、拈起従教著価看」や、宋・大歇謙禅師の偈に「千年滞貨無人買　未免如今累子孫」という句があり、宋の禅僧の中でも売茶翁と同じ用法があるのがよく分かる。

「千年滞貨没人求」は、「千年の滞貨、求る人なし」、つまり長く売れ残ったものを求める人がいないという意味である。『売茶翁偈語訳注』では、出典は『江戸漢詩選第五巻　僧門』と同じ『碧厳録』とあるが、

「訪れる客の少なかった時の思いを詠んだものと思われる」とされている。ここで果たして売茶翁は、自分のお茶が長年売れ残り、誰も必要とされない、無用なものであると思っているのであろうか。

『荘子・逍遥篇』にも、「千年の滞貨」と似た無用な物について以下の内容がある。

「惠子、謂荘子曰、吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫而不中繩墨、其小枝卷曲而不中規矩、立之塗、匠者不顧、今、子之言大而無用、衆所同去也、荘子曰、子獨不見狸狌乎、卑身而伏、以候敖者、東西跳梁不辟高下、中於機辟、死於罔罟、今夫斄牛、其大若垂天之雲、此能為大矣、而不能執鼠、今、子有大樹患其無用、何不樹之於無何有之鄉、廣莫之野、彷徨乎無為其側、逍遙乎寢臥其下、不夭斤斧、物無害者、無所可用、安所困苦哉」

「恵子、荘子に謂いて曰わく、吾れに大樹あり、人これを樗と謂う。其の大本は擁腫して繩墨に中たらず、其の小枝は卷曲して規矩に中たらず。これを塗に立つるも、匠者顧みず。今、子の言は大にして無用、衆の同に去つる所なりと。荘子曰く、子は独れ狸狌を見ざるか。身を卑くして伏し、以て敖者を候い、東西に跳梁して高下を避けざるに、機辟に中たりて、罔罟に死す。今夫の斄牛は、其の大なること垂天の雲の若し。此れ能く大たるも、而も鼠を執うること能わず。今、子に大樹ありてその無用を患う。何ぞこれを無何有の鄉、広莫の野に樹え、彷徨乎として其の側に無為にし、逍遥乎として其の下に寝臥せざる。斤斧に夭られず、物も害する者なし。用うべき所なくも、安ぞ困苦する所あらんやと。」[22]

これは、『荘子』逍遥篇にある有名な話であり、荘子は恵子の質問に対して、「無用の用」について解釈している。世俗的な価値観からすれば、大きな木「樗」は、幹も太く、こぶだらけで、枝まで曲がりくねり、大工も手が施す用がないほど全く役に立たないものであり、誰も振り向いてくれない「無用」のものである。しかし「無用」なものだからこそ、斧や斤で命を落としたり、危害を与えられることもなく、何も困ることはないのである。つまり、「すべてのものから安全な自己を確保するであろう。そこにはつきることのない彷徨の歓喜と極まることのない逍遥の悦楽がある。「安の困苦することかあらんや」―世間的に無価値とされるからといって、何も気に病むことはないではないかというのである。」[23]そして、『荘子』によれば、真に偉大な人間が自己を世俗の矮小さに縛り付ける一切のものから飛翔するように、真に有用なるものは世俗の有用さを超えるのである。世俗の有用さを超えたところに、すなわち世間的に無用とされるものの中に、真の有用さがあるのである。しかし、世俗にとらわれた人間たちは、この世俗の有用さを超える無用なるものの有用さを知らない。

売茶翁は二句目で、いつまでも売れ残るという「千年滞貨」のような表現で、自分の茶は「無用」とされるが、まさに荘子が言う「樗」と同じように、世間一般的な価値観からすれば「無用」であっても、実は「世俗の有用」を超える「真の有用さ」があると訴えているのである。さらに、それを証明する為かのように三、四句目が続くのである。

「萬劫」は仏教語。生まれてから死ぬまでを一劫と言い、萬劫は永遠、極めて永い時間の意味。『景徳傳燈録』[24]巻十九では、「莫将等閑空過時光、一失人身、萬劫不復、不是小事。」とある。「渇心」[25]は水を飲みたく思う心。轉じて、切な欲望の意味である。三、四句目の「若し能く一口に喫過き去られば　萬劫の渇心、直下に休す」を通して見ると、もし一気に（この茶を）飲めば、長い間の喉の渇きのような欲望からたちまち解放されることができると読める。

三首目で、売茶翁は初めて、自分の茶の本質について言及する。それは先述のように、趙州のような茶を目指しているものであり、すなわち、世間一般的に重視する地位や経験などすべてを捨てて、無心になって飲む茶であった。この無心の茶は、世俗の価値観からすれば「無用」のものであり、いつまでも売れ残っている茶であった。しかし、この「無用」の茶こそ、一般的な「有用」なものを超える「無用」のものであり、「真の有用」の茶である。この茶を飲めば、まさに俗世間に縛られていた一切のものから脱出することができ、「そこにはつきることのない彷徨の歓喜と極まることのない逍遥の悦楽がある」としているのである。

第四首

身老殊知吾性拙　身老いて、殊に知る吾が性の

拙きを
旧交尽是占機先　旧交は、尽く是れ機先を占む
可憐隻影孤貧客　憐むべし、隻影孤貧の客
売却煎茶充飯銭　煎茶を売却し、飯銭に充つ

「我が身が老いて、つくづく自分の性格の鈍さを知る。古い知人は皆、先を行ってしまった。可哀そうな孤独な者、煎茶を売りながら食費に充てている。」

「性」はさが、うまれつき、人の天賦。『説文』の中に、「性、人之易气性、善者也、从心生聲。」とある。「拙」はつたない、たくみではない。『説文』には、「拙、不巧也、从手出聲。」とある。また、『老子・四十五篇』には、「大巧若拙。」とある。「旧交」は古い知人。「機先」は物事が起ころうとする矢先や兆し。『宋書・徐爰傳』では、「自以、體含徳厚、識鑑機先」とある。ここでの「占機先」は先取られるという意味と思われる。「隻影」は一つの影、孤独の影の意味。「孤貧」は孤独で貧乏である。『漢書・王莽傳』に「莽獨孤貧」とある。

一、二句目の「身老いて、殊に知る吾が性の拙きを、旧交は、尽く是れ機先を占む」では、売茶翁が昔の知り合いと比べて、自分がうまく出世できなったことを嘆いている。表面上、『売茶翁偈語訳注』でも言われたように、「拙」は自らを謙遜する言葉である。売茶翁の半生は僧侶として過ごしているため、「旧交」も同様に僧侶のことであったのかもしれない。つまり、売茶翁は昔の知り合いの様に仏教界ではうまく出世していないと表現しているのである。しかし、この点についてはこれまでにも述べたように、売茶翁は師の化霖の直弟子であり、龍津寺を継ぐことも可能であった。しかし住職となることを避け、寺を離れ売茶翁という特殊な存在となったのは紛れもなく本人の選択であった。先述のように、『老子・四十五篇』では「大巧若拙」とある。つまり、世俗的な価値観からしてみれば、売茶翁は出世の道を捨ててしまっており、これはまさに「拙」である。しかし、この世俗的に「拙」とされるものこそ真の「大巧」だと考えられることも売茶翁の特徴の一つであろう。ちなみに、「拙」について、『江戸漢詩選第五巻　僧門』では、売茶翁には「肯定的なニュアンスがこめられる。」[26] とある。

三句目の「憐むべし、隻影孤貧の客」で注目したいのは「貧」である。「売茶口占十二首」の四首目だけでなく、売茶翁は自分の詩の中で何回も「貧」という字を使っている。例えば、「売茶口占十二首」と同じ時期に作られたと思われる「卜占三首」の第二首では、「一条痩杖伴孤貧」とある。また、「試越渓新茶」にも「由来久貧忍飢渇」とある。さらに、「舎那殿前松下開茶店」では、「貧不苦人人苦貧」ともある。売茶翁の詩を全体的に見てみると、「貧」についての内容が数多く含まれている。そして同じ「貧乏」、「貧窮」の意味を持つ「窮」も、「売茶口占十二首」の第一首に出ており、多用されていることが分かる。売茶翁の生涯を通じて「貧」や「窮」は常に感じられるものであり、一貫した方向、性質のようにも思われる。それでは、売茶翁はどのような意図を持って「貧」や「窮」を述べていたのであろうか。

筆者が売茶翁の精神に少なからぬ影響を与えていると考えるのは『荘子』であるが、「山木篇」には、「貧」について以下のようにある。

「荘子衣大布而補之、以緳係履、而過魏王、魏王曰、何先生之憊邪、荘子曰、貧也、非憊也、士有道徳不能行、憊也、衣弊履穿、貧也、非憊也、此所謂非遭時也」

「荘子、大布を衣てこれを補い、緳を以て履を係いで、魏王を過る。魏王曰わく、何ぞ先生の憊れたるやと。荘子曰わく、貧なり。憊れたるに非ざるなり。士、道徳ありて行なう能わざるは、憊れたるなり。衣弊れ履穿てるは、貧なり、憊れたるに非ざるなり。此れいわゆる時に遭うに非ざるなり。」[27]

これは荘子と魏王との会話についての説話である。荘子のみすぼらしい服装に対して、魏王は「憊」、すなわち「すぐれた道徳を世に行なうことのできない精神的な苦悶をいう」[28] のであるが、それに対して荘子は、（精神的に）疲れたのではなく身なりが「貧」であるだけで、士人として真実の道とその徳をわきまえながら、それを実践できないことが、疲れていることであると答えたのである。つまり、「憊」とは世の中に道徳を行えないという内面的な苦しみであるが、「貧」とは外面的な身なりの粗末さに過ぎないと言っている。

また、孔子の門人で、顔回同様に清貧で知られた

原憲という人物がいる。原憲の家は狭くて、屋根に青草が生え、扉が無いも同然で、雨漏りもする粗末なものであったが、琴を弾き、歌を歌う生活をしていた。『荘子・讓王篇』においては、同じ孔門の子貢と原憲との会話について紹介している。

「子貢曰、嘻、先生何病也、原憲應之曰、憲聞之、无財謂之貧、學而不能行謂之病、今憲貧也、非病也、子貢逡巡而有愧色、原憲笑曰、夫希世而行、比周而友、學以爲人、教以爲己、仁義之慝、輿馬之飾、憲不忍爲也」

「子貢曰く、嘻、先生何ぞ病（憊）れたるやと。原憲これに応じて曰わく、憲これを聞けり。財なきをこれを貧と謂い、学んで行なう能わざるをこれを病ると謂うと。今、憲は貧なり、病るるに非ざうるなりと。子貢逡巡して愧ずる色あり。原憲笑いて曰わく、夫れ世に希めて行ない、比周して友たり、学は以て人の為めにし、教えは以て己れの為めにし、仁義をこれ慝にし、輿馬をこれ飾るは、憲は為すに忍びざるなりと。」[29]

ここでは、原憲が貧しい生活ながらも「匡坐而弦」座って琴を弾いている所に、同じ門人の子貢が華美な服装で訪ねて来て、原憲が粗末な服装で応じた際のやりとりが描かれている。子貢が原憲の姿を見て「疲れているようだ」と言ったところ、原憲は「財産を持たないのを貧しいといい、自らの学んだことを実践できないのを疲れているという。今、私の生活は貧しいが、疲れてはいない」と答えたのである。

このように『荘子』においては、「貧」について「憊」との対立を通して説明している。つまり、「貧」は外見的な貧しさだけであって、「憊」のような内面的な疲れではないのである。

さて、龍津寺での安易な生活を捨て、茶売りを選んだのは売茶翁自身であったので、彼自身は出世できないことや生活の貧しさを惨めに考えていたとは思えない。また、売茶翁の詩全体を見ても、「貧」「窮」に関する用語は数多く存在するが、「憊」については特に書かれていない。

これらのことから、売茶翁における「貧」とは、まさに『荘子』の言う外面的な「貧」であり、貧しさであるが、一方で内面的な「憊」は感じておらず、精神的な豊かさを追求することができているとの自己表現ではないだろうか。これは、まさに「安貧楽道」[30]のような、貧に安じて自分の信じる道を楽しむという理想のためなら、貧窮な環境に身を置いても良いという境地だったのではないだろうか。

第五首

初心不改幾春秋　初心改めず、幾春秋
性癖風顚竟不休　性癖風顚、竟に休せず
紫陌紅塵謾盤礴　紫陌紅塵、謾りに盤礴
世波険処泛虚舟　世波険しき処、虚舟を泛ぶ

「初心を改めることなく、長い月日が経った。自分の変わった性格は相変わらずだ。世俗にみだりに居座り、世間の険しさに空の船を浮かべる。」

「初心」は最初に思い立った心、もとの考えの意味。「春秋」は春と秋。ここでは、四季の春夏秋冬である。「性癖」は生まれつき、持前の癖。『蒙齋筆談、上』に「朴性癖常騎驢。」とある。「風顚」は風狂のこと。仏教本来の戒律などを逸した行動。「風顚」はよく売茶翁の詩に使われるものであるが、紀律にとらわれない修行の仕方のこと。「紫陌紅塵」とは、街の埃、すなわち俗塵を示している。劉禹錫「元和十一年自朗州召至京戯贈看花諸君子」に「紫陌紅塵拂面來」とある。「盤礴」は「槃礴」とも書き、足を開いて座る意味。『荘子・田子方』に「宋元君将書図…有一史後至者、儋儋然不趨、受揖不立、因之舍。公使人視之、則解衣槃礴、贏。」とある。「世波険処」「虚舟」は、もとは空の船、何も乗せていない舟の意味である。『荘子・列禦寇篇』に、「巧者勞而知者憂、無能者無所求、飽食而敖遊、汎若不繫之舟、虚而敖遊者也」とある。

一句目の「初心」とは、単に自由な身になるだけの意味であったのだろうか。この詩は通仙亭を開業して間もない頃に書かれたと推測されるが、この後、売茶翁が約20年もの間売茶を続け、深い精神性を煎茶に投影していったことを考えれば、ここの初心とは、やはり茶を売ることだという強い意志であったように思われる。つまり、「初心改めず、幾春秋」は、お茶を売り始めて何年も経っているとのことである。そう考えれば、通仙亭で売茶を始めて2～3年余りで、この表現を用いるのは違和感を覚える。そうであれば、通仙亭以前にも売茶を行ってきた可能性が生じてくるのである。

二句目の「性癖風顚、竟に休せず」の「性癖」は生まれつきの癖である。売茶翁は「売茶口占十二首」で「性」を二度使っている。初めは四首目の「身老いて、殊に知る吾が性の拙きを」であり、売茶翁は自分の「性」を「拙」としていた。つまり、売茶翁は自分の生まれつきの癖を「風顚」で「拙」だとしているのである。先述のように、売茶翁は龍津寺の住職になる出世の道を捨て、「風顚」を選んだ。世間の価値観からしてみれば、確かに「拙」であるが、むしろ売茶翁自身は「大巧若拙」の意味に「拙」を捉えて、真の「大巧」に近づこうとしていたようにも思われる。

また、「風顚」について、『江戸漢詩選第五巻　僧門』では、「大潮の「月海兄に復する書」(『西溟余稿』文部・巻三）に「又謂く、吾が兄、他日、必ず箇の風顚と為りて、往く所を問うことなく、若しくは第五橋下に於てせんと」[31] とあり、風顚が売茶翁の理想であったことが知られる」[32] ともあるように、「風顚」こそが売茶翁の理想であったとされてきたが、果たして「風顚」は売茶翁の理想であると言えるのだろうか。

二句目の「性癖風顚、竟に休せず」、三句目の「紫陌紅塵、謾りに盤礴」を見てみると、売茶翁は、風顚という紀律にとらわれない修行の仕方を好んでいて、これを「俗世間にみだりに居座る」のように実践している。言い換えると、「謾りに盤礴」という格好で「性癖風顚」の修行をしているのである。売茶翁はこういう修行を理想とするより、あくまでも形式的なものとして捉えていたのかもしれない。

四句目の「世波険しき処、虚舟を泛ぶ」について、『賣茶翁』(1934 年）では、「虚舟」を「清虚の心を以て處すること、杜詩に曰く君に對すれば是れ虚舟を泛ぶるかと疑ふ、其注に其人に對するに及んで、虚舟を泛ぶる如し、盖し静虚の心其人と倶に忘ると。所謂、塵中塵に染まざる境地を云ふ乎」[33] と解釈している。また、『江戸漢詩選第五巻　僧門』においては、「『荘子』山木に虚船として出る（虚舟の語は『淮南子』詮言にみえる)。無心の境地でいれば、世にあって害されることがないことを喩える。」[34] とある。さらに、『売茶翁偈語訳注』では、「虚しい船たびとも思える」[35] としている。

この「虚舟」について、売茶翁が影響を受けたと思われる『荘子・列禦寇篇』においては、「虚舟」について以下のようにある。

「巧者勞而知者憂、無能者無所求、食而敖遊、汎若不繫之舟、虚而敖遊者也」

「巧者は労して知者は憂うるも、無能者は求むる所なく、食らいて遨遊す。汎として不繫の舟の若く、虚にして遨遊する者なりと」[36]

つまり、器用な者は体を疲れさせ、知識のある者は心を苦しめるが、無能な者は特に求めるものもなく、物を食べて気ままに遊ぶ。ゆらゆらと綱が切れて波間に浮かぶ小舟のように、虚心で遊ぶ者が素晴らしいとしている。世間一般的な価値観からすると、売茶翁が四首目の「旧交は、尽く是れ機先を占む」にある「機先を占む旧交」は、出世を望む人たちで、まさに「巧者」と「知者」になるだろう。そして、自分のような「性癖風顚」なものは、世間の目から見ると「無能者」であり、無能な生活をしている。しかし、こういった「無能者」だからこそ、「世波険しき処」に「虚舟を泛ぶ」ことができ、「ゆらゆらと波にただよう捨小舟のように、己を虚しくして気ままに人生を楽しむ自由な人」[37] になれ、「己れを虚しくして以て世に遊ぶ」[38] ことができるのである。これこそ売茶翁の真の理想であるのではないだろうか。

以上、述べてきたように、従来、売茶翁の理想とされてきた「風顚」は、理想よりも形式的なものであり、売茶翁は「風顚」という形式的な修行によって、険しい世波に虚舟を泛べ、『荘子』における「世を遨遊する」様な最高な生き方を実践している。これこそ、売茶翁の理想であり、売茶翁が目指している最高の精神的境地であったと言えよう。

第六首

建溪絶品飾龍鳳	建溪絶品、龍鳳を飾る
換却舌頭價萬金	舌頭を換却すること價萬金
正向鳳凰城畔賞	まさに鳳凰の城畔に向って賞す
依然落節古猶今	依然として節を落ちること、古は猶お今の如し

「建溪の茶は絶品で龍鳳が飾られる。舌を取り替えるようで万金の価値がある。都を臨んで（抹茶を）味わうのも、昔も今も相変わらず節度を越えて

いる。」

「建溪」は福建省で最大の河川である閩江の上流に流れる「沙溪」「富屯溪」と併せて三大河川である。建溪は武夷山と仙霞嶺から流れており、茶の産地であることから、茶は「建茶・建茗」とも言われる。五代から宋代にかけて、最高級の茶を提供した「北苑」もこの地で、建安（福建省建甌）の東側、鳳凰山の南側に位置した。「龍鳳」とは、この建溪で作られたお茶に皇帝や王族のシンボルの龍と鳳凰の模様を彫りこんだことから「龍鳳団茶」と呼ばれたことに由来する。このことについては、宋の欧陽脩の作品にも「双井茶」と題したものがあるが、その中で「君不見建溪龍鳳団、不改旧時香味色」とあり、絶賛するものであったことがうかがえる。

「換却舌頭」は舌を換えるほどの意味。大潮の次韻の第五首にも「換舌」とある。宋・釋法薫の「煎竹」に「塩醋費他多少了、舌頭換却不曾知」、宋・鄭清之の「拙偈調偃溪上人」にも「偃溪爛嚼雪窓紙、換却舌頭別参起」とある。「鳳凰城」については、天皇のことを鳳凰と示すのか[39]、あるいは宇治の平等院鳳凰堂を示すのかは定かではないが、売茶翁の活動していた鴨川と天皇の居場所であった御所がそれほど離れていなかったことを考慮すれば、売茶翁が御所そして京都を意識したことは明らかであろう。「賞」は、賜う、ほめる、称える意味。ここでは、賞味であり、お茶を鑑賞して味を楽しむこと。『集韻』では、「賞、一曰、玩也。」とある。また、『管子・覇言』にも、「其所賞者明聖也。」とあり、その注に「賞、謂楽翫也。」とある。

「落節」は、「節」は節度のこと、のり、ほどを指す。『漢書、循吏、龔遂』には、「功曹以爲王生素耆酒、亡節度、不可使」とある。「落節」は節度を失うという意味である。『陸象山先生全集』（『四部叢刊』）に、「要常践道。践道則精明。一不践道、便不精明、便失枝落節」とあり、過失をする、間違いをする意味でもある。

これについて、『賣茶翁』（1934年）では「利益を失ふを落節と云ひ、資本を失ふを拔本と云ふ。虚堂録に云く若し劍手相應に非ずんば、ほとんど落節せんと、今は茶賣茶翁の真意を買ふものなく、随て利亦なきを云ふか。」[40]と解釈しており、「落節」の出典を『虚堂録』としている。また、『江戸漢詩選第五巻　僧門』では「損をする。『碧厳録』四則・本則著語に「東辺に落節し、西辺に抜本す」」と説明があり、『賣茶翁』（1934年）の影響を受けていることが分かる。『虚堂録』は虚堂智愚（1185-1269年）の語録で、日本の禅宗に大きな影響を与えたとされる。そういう意味では、売茶翁も『虚堂録』を読んだ可能性が大きい。その原に文は「乃舉。百丈因。僧問。如何是奇特事。丈云。獨坐大雄峯。僧禮拜。丈便打。師云。百丈故是大機大用。若非劒手相酬幾乎落節」とある。

「古猶今」は、昔も今も変わらないという意味。『列子』巻第七「楊朱篇」には「五情好惡、古猶今也、四體安危、古猶今也、世事苦樂、古猶今也、變易治亂、古猶今也。」とある。

第一、二句では、売茶翁が「建溪絶品、龍鳳を飾る、舌頭を換却すること價萬金」と、龍鳳が施された建溪の団茶は、舌を換えるほどの「萬金」の価値がある味であると述べており、建溪の団茶の素晴らしい味を賛美しているようにも見える。

今までの先行研究とは、第一、二句についての解釈にはそれほど違いはないが、第三、四句において、明らかに異なっている。

『売茶翁集成』の「賣茶翁偈語平解」では、「しかも私は、田舎とは違って、天子様のござる鳳凰城、京都のまん中で、店を出しています。それこそ先客万来。しかし、お客さんはただうまい、うまいの連発で、銘茶の奥に秘む真味を、味わっていただける人は、そう多くはありませぬ。こう思うと、高価な茶を仕入れても、結局は、私の茶店の経営方針からみれば、元もとり返せぬ、落節―つまり、利益を失っています。いまも昔も、俗人のやり方は変わらぬものと思われます。」[41]とある。

また、『江戸漢詩選第五巻　僧門』では、「この茶をその名もゆかりの鳳凰城のあたりで味わうのだから、これ程贅沢なことはないのに、昔からずっとあいも変わらず損ばかりしている。」[42]と訳がある。

さらに『売茶翁偈語訳注』においては、「まさしく龍鳳ゆかりの、鳳凰城のほとりで味わえるのに、相も変わらず昔も今も喫まないと損をするのに客は少い。」[43]と訳し、さらに「このような意義深い茶を、都の一角で味わうことができるのに、それとは知らないで通り過ぎる人がいる。物事にそれぞれ意味があることに気が付いていない人があることは、今も

昔も変わらない。遠慮しないで茶を喫みにお出でなさいといっているのであろう」[44] と解釈した。

三者とも「落節」を「損する」と福山暁菴氏の『賣茶翁』での解釈の影響を受けた上で、それぞれ解釈を加えているが、これらに対して、筆者は違う解釈を試みたい。

第三句の「まさに鳳凰の城畔に向って賞す」は、単に京都の御所に向って茶を味わうという意味としてとらえるのであろうか。あるいは、当時の京都で大勢が抹茶に親しんでいた様子を「建溪の団茶」と表現したのであろうか。[45] 後者で解釈するならば、売茶翁はこの表現により、昔の中国の団茶、今の京都の（抹）茶の両者を同時に言及したとも考えられる。

そのように考えると、第四句の「依然として節を落ちること、古は猶お今の如し」とあるのも、一見すれば売茶翁が今も昔も落ちぶれているという表現に感じられるが、先の解釈から発展させれば、昔の建溪の団茶でも、今の京都の（抹）茶でも、「古は猶お今の如し」のように、昔も今も変わらず、節度が失われている、つまりは味や形式を重視することが度を越していることを嘆いていると主張したように思われる。売茶翁が茶の味や形式的なものより、茶の本質的な所に気付いて欲しいという真意を伝えようとしている句でもあったのではないだろうか。

第七首

自覚疎狂違世間　自ら疎狂を覚え、世間に違う
陸沈城市恣癡頑　城市に陸沈し、癡頑を恣にす
誰言形影唯相弔　誰が言う形影、唯相弔うと
十二先生伴我閑　十二先生、我が閑に伴う

「自分が常識外れと感じつつも、世間とは異なった存在となっている。街に隠遁し、好き勝手に頑なである。そんな私を誰が孤独だというのか、私には茶具たちが相手をしてくれている。」

「疎狂」とは「疏狂」とも書き、自由奔放の意である。宋・朱敦儒の「鷓鴣天・西都作」には「我是清都山水郎、天教懶慢帯疏狂」とある。「陸沈」は、俗世界に隠遁する意味。『荘子・雑篇・則陽篇』にも、「陸沈者」として出てきており、孔子を登場させて隠者のあり方を示している。『賣茶翁』(1934年)でも、「荘子に曰く方且世と違ひて心之と俱にするを屑しとせず、是れ陸沈する者なり、其註に沈むこと水に在らずして陸に在り、隠者の市廛に隠に喩ふと、乃ち顯れて而も隠るの意なり。」[46] と説明をしている。「癡頑」は、「痴頑」のこと、もとは愚かでかたくなの意味だが、ここでは、自分が世俗と違うことを自負的に表現しているのであろうか。「形影相弔」とは、体と影とが寄り添って慰めあうことから、孤独であることを示している。魏の時代の曹植の「上責躬應詔詩表」には、「形影相弔、五情愧赧。」、『文選』の中の李密の「陳情表」にも「外無期功強近之親、內無應門五尺之僮、煢煢獨立、形影相弔。」とある。「十二先生」とは、茶具全般を指すが、その由来は、南宋の審安老人の『茶具図賛』(1269年）であったとされる。「閑」はひま、いとまの意味。「伴我閑」については、宋・陸游の「出游」に「挙世誰能伴我閑、出遊随所一開顔」があり、暇をしているというのである。

ここで売茶翁は、最初の二句で自分の生き方が世間と違うことについて、陸沈や癡頑という言葉を用い個性的であることに自負を持っているように感じられる。とりわけ、「陸沈」については、『荘子』「則陽篇」では以下のように説明されている。

「孔子之楚、舍於蟻丘之漿、其隣有夫妻臣妾登極者、子路曰、是稷稷何爲者邪、仲尼曰、是聖人僕也、是自埋於民、自蔵於畔、其聲銷、其志无窮、其口雖言、其心未嘗言、方且與世違、而心不屑與之俱、是陸沈者也、是其市南宜僚邪」

「孔子、楚に之き、蟻丘の漿に舎る。其の隣に夫妻臣妾の極に登る者あり。子路曰わく、是の稷稷たるは何為る者ぞやと。仲尼曰わく、是れ聖人の僕(徒)なり。是れ自ら民に埋もれ、自ら畔に蔵る。其の声は銷え、其の志は窮まりなし。其の口は言うと雖も、其の心は未だ嘗て言わず。方且に世と違いて、心これと俱にするを屑しとせず。是れ陸沈する者なり。是れ其れ市南宜僚[47] かと」[48]

これから陸沈を引用することで、自分が隠者であることをしっかり主張しているのである。この「陸沈者」とは、「自分で民くさのあいだに埋もれ、自分で畑仕事のなかに身を隠している。その名声は世間から消え去り、その道への志は果たしてもない。口では普通に話していても、その心は無言の静寂だ。

つまり世俗に背を向けて、俗人どもといっしょになることを心にいさぎよしとしない」[49]のである。これはまさに、「大隠隠朝市」のことであり、大悟徹底した真の隠者は、山林などに隠棲せず、民衆の中で生活する。衆人の中に住み、一見、衆人と異ならない生活をし、しかも其の身の清さを保つという意である。

売茶翁は、自ら龍津寺を離れ、いわば「山林」で僧侶の修行を続けることを捨て、京都のような人混みの「市」で茶を売る生活を選んだが、これは第二句「城市に陸沈し、癡頑を恣に」すること、そのものであり、売茶翁が「城市に陸沈」する「大隠」を目指していたことが分かる。

後半の二句では、そのような売茶翁を「形影相弔」と表現してはいけないと言っており、十二先生ともいうべき多くの茶器達が、自らの静けさに寄り添っていると、むしろそれが孤独ではなく自ら望んだ環境であり、売茶翁が求めた孤高であるかのように感じさせる。

第八首

行蔵自古且随縁	行蔵は古えより且（かりに）縁に随う
或宿孤峯或掣顛	或いは孤峰に宿し、或いは掣顛（せいてん）
道是煎茶接来往	道う是れ煎茶来往を接す
笑吾賣弄乞文銭	笑う、吾が売弄、文銭を乞うことを

「出処進退は古くから縁によるという。時には山頂に住み、時には風変わり。茶を煎じて往来する人をもてなすと言い、私が偉そうにお金を求めていることを笑え」

「行蔵」とは世に出て道を行うこと、世から退いて隠れることの意味である。『論語・述而篇』に「用之則行、舎之則蔵」とある。ここでは、「随縁」は、仏教用語。因縁に随って現象を起すこと。水が風の縁に随って波を起すようなもの。『北齋書・陸法和傳』に「（文宣）賜法和云云、奴婢二百人、云云、法和所得奴婢盡免之、曰、各随縁去。」とあるが、『漢語大辞典』によれば、機縁に従い、自然に任せる[50]意味でもある。「孤峯」とは、一つの峰。孤立した山。張説「送梁六詩」に「巴陵一望洞庭秋、日見孤峯水上浮」とある。「掣顛」は、『臨済録』にも唐代の禅僧普化[51]に対する表現として「掣風掣顛」とある。売茶翁はここで自身のことを「風顛」としている。「来往」は行く者と来る者。「賣弄」は寵を恃んで権を弄す。転じて誇り示す、自慢する、衒うという意味。『後漢書、楊震傳』に「盛修第舎、賣弄威福。」とある。「文」はもん、一厘の穴銭の称。「文銭」は、小銭、少ないお金の意味。

一句目の「行蔵は古えより且（かりに）縁に随う」、「世に出るのも、退いていても縁に随う」とあり、『論語』を出典とする「行蔵」と仏教用語の「随縁」が使われている。「行蔵」は、『論語・述而篇』の「用之則行、舎之則蔵」、「之を用ふれば則ち行ひ、之を舎つれば則ち蔵る。」であり、本来、認めてくれる君主がいれば、進んで自分の正しいと思う道を実践し、認められなければ、世の中から隠れるという孔子の政治に対する進退の考え方である。『賣茶翁』（1934年）では、『論語』の他、「又岑參が詩に曰く早年進退に迷ひ、晩節行蔵を悟ると。又一生不休の意もあり、虚堂録に云く自ら笑ふ一生定力なく行蔵多く業風に吹かるることを」[52]と解釈しているが、売茶翁の詩においては、どういう意味をしているのであろうか。

二句目の「或いは孤峰に宿し、或いは掣顛」は一句目を補足したものである。大典の『売茶翁傳』[53]によれば、「筑之雷山、高二十里、翁嘗棲止其頂、飯麥屑飲水、下浴于溪、以過一夏」とあるが、売茶翁は麦の粉と水だけで、筑前雷山[54]で夏を過ごしたという記録が残されている。つまり、売茶翁がいう「蔵」は世間を離れ、山林に隠れ、俗を離れる、いわば「脱俗」の意味だと読み取れる。そして、京都に出て茶店を開き、人混みの中で茶を売ることを自ら「風顛」、「掣顛」と言ったように、売茶翁にとっての「行」は、「陸沈者」[55]として俗世間に出て、茶を売りながら、「大隠隠朝市」[56]の生活する「入俗」のことと言えよう。こうして、売茶翁の「行蔵」は、本来の意味を使っているわけではなく、俗世間を離れるか、入るかの「去俗」と「入俗」を指していることが分かる。そして、売茶翁はこうした「去俗」と「入俗」を、意欲的に行ったのではなく、「随縁」という縁に随うものであり、自然のありのままに随ったというのである。

売茶翁が俗世間に入る（入俗）のは、三句目の「道う是れ煎茶来往を接す」、茶を煎じて往来する人々

をもてなすためであるが、それが世間の人たちに理解されない。四句目で「笑う、吾が売弄、文銭を乞うことを」と表しているように、ただわずかのお金をもらうために茶売りをしていると思われがちだが、俗世間の一般的な価値観に縛られないことを売茶翁が目指していたものではなかっただろうか。

この第八首を通じて感じることは、やはり売茶翁が世の中の毀誉褒貶などにはとらわれることなく、例え型破りで風変りな存在であろうとも、それもすべて「随縁」であるとし、自然体であるとしたことを示している。これはやはり荘子の物化に近い考え方を示しているものである。

第九首

遠覓霊苗入大唐　遠く霊苗を覓めて大唐に入り
持帰西老播扶桑　持ち帰って西老扶桑に播す
宇陽一味天然別　宇陽の一味、天然別なり
堪嘆時人論色香　嘆ずるに堪えたり、時人の色香を論ずるを

「はるばるお茶を求めて、中国に行き、持ち帰った栄西は日本に広めた。宇治茶の味は格別であるのに、人々が色や香りだけを求めるのは嘆かわしい。」

「覓」は探す意味。「霊苗」はすぐれてよい苗。『拾遺記、一、炎帝神農』に「神芝發其異色、霊苗擢其嘉穎。」とある。ここでは茶の苗のことを指す。「大唐」は、「唐」、中国のこと。「西老」は栄西禅師のことで、臨済宗の開祖、建仁寺の開山である。また、宋から茶を持ち帰ったと広く知られ、『喫茶養生記』を著した。「扶桑」は日本を指していう。王維の「送祕書晁監還日本詩」に、「郷國扶桑外、主人孤島中」とある。「宇陽」は、宇治のこと。「一味」は一つの味。南北朝時代高允の「酒訓」に「言所益者、止于一味之益、不亦寡乎。」とある。「天然」は自然、人為の加わらないもの。「別」は格別の意味。「時人」そのときの人。ここでは、今の人を指す。「色香」は文字通り、色と香りのことである。ここでは、茶の色と香りのことを言う。

一、二句目の「遠く霊苗を覓めて大唐に入り、持ち帰って西老扶桑に播す」では、売茶翁の茶に対しての思いが込められている。ここで注目したいのは「西老」、栄西のことである。周知のように、売茶翁が11歳から出家していたのは黄檗宗であり、当時は黄檗派であり、その源流は臨済宗である。とりわけ、栄西は日本の臨済宗の開祖であり、宋の茶も栄西によって、中国から持ち帰り、当時の抹茶法と同時にもたらされたのである。日本における抹茶は臨済により始まって、臨済と大きな繋がりがあると売茶翁は一、二句目に込められていると思われる。

こうして、臨済宗開祖の栄西によって持ち帰られた抹茶は京都で根付いて、三句目の「宇陽の一味、天然別なり」のような、格別な存在となった。それには、茶そのものだけでなく、茶の精神も含まれているのである。しかし、売茶翁が四句目「嘆ずるに堪えたり、時人の色香を論ずるを」で述べるように、栄西が持ち帰ったのは茶だけではないはずなのに、今の人は茶の精神より色や香りばかりを話題にしていて、素晴らしい茶の精神は受け継がれていないと、同じ臨済宗としての売茶翁の嘆きであり、残念な気持ちを表現したものである。

これについて『売茶翁集成』、『江戸漢詩選第五巻僧門』、『売茶翁偈語訳注』では茶の種類を言及しなかったことに対して、『賣茶翁』（1934年）では「唯茶の色香を論じて、煎茶の真精神を閑却せる者の多きを痛嘆するの意か、茶譜に云く茶に真香あり、佳味あり、正色ありと。」[57]と「煎茶」であると解釈している。売茶翁が京都で茶を売り始めた当時、煎茶はまだそれほど普及していなかったため、種類を考えるならば、売茶翁は抹茶に対して批判しているのではないかと思われる。

第十首

瓦鼎翻波松籟發　瓦鼎に翻波、松籟発する
点来売與五湖人　点来売与す、五湖の人
奈何箇裡無知味　奈何ぞ、箇裡に味を知る無し
獨坐自煎絶等倫　独坐自煎し、等倫を絶する

「釜の中に波が起こり、松風の様な釜音が発し、その茶を世間の人に売り与える。この味をわかる人がいないのはどうしてだろうか。素晴らしいお茶を独りで煎じている」

「瓦鼎」は茶釜のこと。「松籟」とは、松風の音、ここでは茶釜の音を喩える。「五湖」は、五湖四海のことで、中国全土を意味するが、ここでは天下の意味であり、「五湖人」は天下の人々である。「箇裡」は、この中、その中の意味。唐・王維の詩「同比部

楊員外十五夜游有懐静者季」に、「香車宝馬共喧闐
　箇裡多情侠少年」とある。「獨坐」はただ一人で座っているの意味。『江戸漢詩選第五巻　僧門』と『売茶翁偈語訳注』では、その出典を『碧厳録』二十六則・本則の「僧、百丈に問う、如何なるか是れ奇特の事。丈云く、独り大雄峰に坐す。」としている[58]が、仏典ではないが、李陵の「答蘇武書」にも「身之窮困、獨坐愁苦。」とあり、また、王維の「竹里館詩」にも「獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯」と「獨坐」を使っている。「絶等倫」、「絶等」は抜きん出ている意味であり、「倫」は並び、順序の意で、ここでは茶の味が絶妙であることを表現している。『賣茶翁』(1934年）では「漢書甘延壽傳に曰く投石超距等倫を絶すると。」[59]と出典をあげている。

第一句の「瓦鼎に翻波、松籟発する」は、売茶翁が茶を沸かしている様子をうかがうことができる。そのお茶を、第二句で「点来売与す、五湖の人」のように、天下の人に飲ませてあげたいという売茶翁の思いが込められている。しかし、「奈何ぞ、箇裡に味を知る無し」と、自分のお茶を分かってくれる人がいないとしている。ここでいう茶の味は、九首目と同様に、単純に茶の味そのものを指すのではなく、茶の精神性も含まれているのである。こうした茶の精神を分かってもらえなくても、売茶翁は「独坐自煎し、等倫を絶する」と、一人で絶品の茶を煎じて味わうという。この四句目について、『賣茶翁』(1934年）では、「蓋し、翁獨自の煎茶は他の一般茶家の追随を許さざる所あり。」[60]と解釈しているが、これまで見てきたように、俗世間の価値観に縛られない売茶翁は自身を茶家として定義しないはずであるし、むしろ追随されたくないと思われる。したがってここでは、「独自の煎茶」より、「孤高」という意味を持ってると思われる。

第十一首

　五台拈起玻璃盞　五台、玻璃盞を拈起す
　塞断口門味太奇　口門を塞断し、味太だ奇なり
　莫道南方無這箇　道う莫かれ、南方這箇無し
　通仙亭上也無虧　通仙亭上も、虧ける無し

「五台山でガラスの杯を取り上げると、口を塞ぐほどに味が素晴らしい。南の方にはこのような物がないと言わないでくれ、通仙亭では欠かすことはないのだから。」

「五台」は、「五台山」のこと、中国山西省にある山で、普陀山・九華山・峨嵋山と並び仏教四山の一つであり、文殊菩薩の聖地とされる。「拈」は指でとること。「拈起」は持ち出すこと。「玻璃盞」はガラスの茶杯のことで、ここでは中国禅宗の公案、文殊菩薩と無著禅師の会話に出た内容をなぞらえている。「塞断口門」は、口を塞ぐ。口を塞いでしまうほど味が素晴らしいという意味である。「南方」も「玻璃盞」と同じように、文殊菩薩と無著禅師の会話「問曰、南方還有這箇否」にある「南方」をなぞらえている。「通仙亭」は売茶翁の茶店。「無虧」は欠けないことで戦国時代の屈原の『楚辞・九歌第二』、大司命に「愁人兮奈何、願若今兮無虧。」とある。

売茶翁の十一首目は、ほとんど文殊菩薩と無著禅師の会話の内容とされる禅宗の公案に関わるものである。これは『碧厳録』[61]と『五燈會元』[62]に収録されているのであるが、『賣茶翁』(1934年)、『江戸漢詩選第五巻　僧門』、『売茶翁偈語訳注』では、『碧厳録』を出典とし、『江戸漢詩選第五巻　僧門』は「この句は、『碧厳録』九十一則・頌評唱に引く文殊と無著文喜（八二一－九〇〇仰山慧寂の嗣）の問答をもとにしている。「無著、文殊を訪う。喫茶の次、文殊、玻璃の盞子を挙起して云く、南方に還た這箇有りや。著云く、無。殊云く、尋常這箇を用てか茶を喫す。著、語なし（『五灯会元』九にも出る)。」[63]とある。

実際に『碧厳録』の原文には、以下のようにある。

無著遊五台。至中路荒僻処。文殊化一寺。接他宿。遂問。近離甚処。著云。南方。殊云。南方仏法如何住持。著云。末法比丘。少奉戒律。殊云。多少衆。著云、或三百或五百。無著却問文殊。此間如何住持。殊云。凡聖同居。龍蛇混雑。著云。多少衆。殊云。前三三後三三。却喫茶。文殊挙起玻璃盞子云。南方還有這箇麼。著云。無。殊云。尋常将什麼喫茶、著無語。遂辞去。

確かに『碧厳録』の内容を一読すれば、売茶翁は文殊菩薩と無著禅師がガラスの茶杯についての内容をなぞらえていることがよく分かる。しかし、売茶翁はどうして十一首でこの公案に言及したのかという点については『碧厳録』だけでは解釈が不十分だ

と筆者は考える。そこで、売茶翁の詩をより吟味する為に、『五燈會元』の内容も見てみたい。『五燈會元』巻九「杭州無著文喜禅師」には、以下のようにある。

師直往五臺山華厳寺。至金剛窟禮謁。遇一老翁牽牛而行。邀師入寺。翁呼均提。有童子應聲出迎。翁縱牛。引師陞堂。堂宇皆燿金色。翁踞牀指繡墩命坐。翁曰。近自何来。師曰。南方。翁曰。南方佛法如何住持。師曰。末法比丘。少奉戒律。翁曰。多少衆。師曰。或三百。或五百。師却問。此間佛法如何住持。翁曰。竜蛇混雑。凡聖同居。師曰。多少衆。翁曰。前三三。後三三。翁呼童子致茶。併進酥酪。師納其味。心意豁然。翁拈起玻璃盞。問曰。南方還有這箇否。師曰。無。翁曰。尋常将甚麼喫茶。師無對。師覩日色稍晩。遂問翁。擬投一宿得否。翁曰。汝有執心在。不得宿。師曰。某甲無執心。翁曰。汝曾受戒否。師曰。受戒久矣。翁曰。汝若無執心。何用受戒。師辭退。

『五燈會元』「杭州無著文喜禅師」では、文殊が老翁の姿に化けて、無著と遭遇する話から始まっている。ガラスの茶杯に関しての応答は、『碧厳録』とほぼ同じであるが、両者には異なる部分が三点ほど見られる。

一つは、使われる文字である。文殊がガラスの茶杯を持ち出す際の表現について、『碧厳録』では「文殊挙起玻璃盞子云」とあり、『五燈會元』では「翁拈起玻璃盞」とある。両者を売茶翁の詩と比較すると、文字からすると、『五燈會元』が、より売茶翁に引用された可能性が高いことがわかる。

また、茶については、『碧厳録』では文殊と無著が茶杯についての会話に留まるのに対して、『五燈會元』では、まず「師納其味、心意豁然（師、其の味を納めて、心意豁然たり）」とあり、無著が出されたお茶を味わったことで気分も明るくなったとある。この点についても、売茶翁の二句目の「口門を塞断し、味太だ奇なり」という表現が、茶の味とその効能について言及しているので、『五燈會元』を参考にした可能性が高いと思われる。

最後に、茶杯について話の後の、文殊と無著の会話に注目したい。『碧厳録』では、茶杯についての内容のみで話が終わったのであるが、『五燈會元』は続きが興味深い。無著は文殊の茶杯についての問いに答えられなく、一晩泊めて欲しいと頼み出し、文殊と以下の会話があった。

「遂に翁に問う。擬するに一宿を投じるに得るや否や。汝、執心を有して在り、宿するを得ず。師曰く、其甲執心無し。翁曰く、汝曾て受戒するや否や。師曰く、受戒して久し。翁曰く、汝もし執心無くんば、何ぞ受戒を用いん。師辞退す。」

つまり、無著との会話を通じて、文殊は無著が「執心」を持っていることを見抜き、この「執心」こそがいけないと言うのである。売茶翁自身、佐賀の龍津寺を離れ、住職の役目、僧侶としての安定した生活に執着せず、まさに、「執心」を捨てて、売茶翁となったのである。「売茶口占十二首」で見てきたように、売茶翁は茶そのものにこだわることはしなかったのは明らかである。そう考えると、単なる茶に関する内容があったから文殊と無著の会話を売茶翁が引用したとは考えられにくい。筆者は、『五燈會元』で述べられた「執心」の内容こそ、売茶翁がこの公案を引用した目的であったと考える。「玻璃盞」についての内容は、確かに茶の入れ物ではあったが、あくまでも表面上なものであり、この公案に売茶翁自身が共鳴して、通仙亭での売茶活動によって、世俗的な価値観に対する「執心」を持たない心の大切さを人々に伝えようとしたのではないだろうか。売茶翁は四句目で、「通仙亭上也、虧ける無し」とあるように、文殊菩薩の言う「執心」を持たないお茶が、自分の通仙亭にあると自負しているのである。

第十二首

堺口路頭千古趣　堺口路頭、千古の趣
清香万里没邊春　清香万里、没辺の春
無端随分開舗席　端無く分に随い舗席を開く
是我由来待賈人　是れ我れ由来賈を待つ人

「土手の道には昔の趣があり、良い香りがはるか遠くまで広がっている。絶えず気ままに店を開いているが、私はそもそも買い手を待っているのだ。」

「堺口」は堰のほとり、「路頭」は道端である。「千古」は大昔。「千古趣」は昔の趣。「没辺春」とは、「無辺春」と同じ、宋・宏智禅師の詩「百草頭上無辺春」

に由来すると思われ、これは森羅万象、果てしなく春が訪れることを示している。

先ほど「無端」は思わずという意味を表すとしたが、[64]「無端」について、福山暁菴の注には「はしなくと読み、はからず、わけなくの意、荘子註に云く無端は不図の義、卒爾の義、由緒無きの義なりと」とある。この点について実際に金谷治注の『荘子』から引用した以下の文章がある。

「彼将処乎不淫之度、而蔵乎無端之紀[65]、遊乎万物之所終始」（達生篇）

「彼将に不淫の度（宅）に処りて、無端の紀（基）に蔵れ、万物の終始する所に遊び」[66]

「死有所乎帰、生有所乎萌、始終相反乎無端、而莫知乎其所窮」（田子方篇）

「死には帰するに所あり、生には萌すに所あり、始めと終りと無端に相い反りて、其の窮まる所を知るなし。」[67]

「処乎無嚮、行乎無方、挈汝適復之撓撓、以遊無端、出入無旁、与日無始」（在宥篇）

「無嚮に処り、無方に行き、汝の適復（往復）の撓撓を挈げて、以て無端に遊び、無旁（辺）に出入して日と与に始めなし。」[68]

これらはいずれも「無端」を「限りない」という広がりの意味で用いている。筆者も、この詩中においては、「万里」「没邊」などの広がりを持たせていることから、「無端」においても同様の意味にとらえるのが適していると考える。

「随分」については、福山暁菴注の『賣茶翁』では、「随分開舗席、自己の家風を立てること碧岩集に云く分に随って箇の舗席を開くと、翁嘗て人に語りて云く古人物外の活計を追憶するに、蒲鞋を編み、渡子となり、或は力を鬻ぎ、柴を賣る等、皆余が堪えざる所なり、是を以て鴨水河畔人跡の繁き處を相て、小舎を借り得、鋪を開き、茶を烹て、往来の客に賣與し、茶銭を収めて飯銭となす、是れ金が素懐に愜へり、賣茶は児女獨夫の所業にして、人の賤んずる所我れこれを貴しとす、即ちわが吾を快しとする所以の者なりと。」[69]と解釈している。また、『江戸漢詩選第五巻　僧門』では「開舗席」と合わせて、「分相応のこと。…『碧巌録』八十八則・本則著語に「分に随いて箇の舗席を開く」。それぞれの力量に相応して説法する意を含む。」[70]と説明している。さらに、『売茶翁集成』「売茶翁偈語平解」には、「分にしたがってこの舗席を開くという文句に則りまして、私は、私なりの家風を立てるつもりであります。」と訳がある。『売茶翁偈語訳注』でも、「分に随う、分相応、身分相応。」とある。「舗席」についても、「『碧巌録』八十八則「玄沙接物利生の衆生済度」本則著語に「分に随いて箇の舗席を開く」とあるが、その真意はそれぞれの人の力量に応じて説法をするとされる。」[71]。とあるように、最初の福山注の影響が大きいことが分かる。

しかし、売茶翁の生涯及びその詩を通して見てみると、翁は固定した場所で茶を売るのでなく、気ままに様々な場所で茶を売っていたことが分かる。また、売茶翁がある種の流儀とも言うべき「家風を立てる」ことを考えていたかというと、筆者としてはいささか得心できない点がある。

よって、ここでの「随分」は、先人の用いた「分相応」以外に、「場所や時間を気にせず随意に」という解釈も可能ではないだろうか。『漢語大辞典』によれば、唐の王績「独坐」の「百年随分了、未羨陟方壺」と「気ままに」という意味で用いられていることがその証左である。

次に、「由来」はもとから、元来の意味。唐代楊炯の「夜送趙縦詩」に「趙氏連城璧、由来天傳」とある。「待賈人」とは、買う人を待つ。『論語・子罕篇』に「子貢曰、有美玉於斯、韞匵而蔵諸、求善賈而沽諸、子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者也。」とある。これは、孔子の弟子の子貢が、「美しい宝玉をしまっておくのか、買い手を探して買ってもらうのか」と暗に孔子に仕官しないかを尋ねたものである。これに対して孔子は、「売ろう売ろう、買い手を待っている」と応じたものである。

第一、二句「堋口路頭、千古の趣、清香万里、没辺の春」は、売茶翁のお茶のスタイルを表している。それは、茶室で行うものではなく、川のほとりや道端のような所で行う風流の茶であり、春の季節にはどこまでも漂う香りを持つものである。第五首で見られたように、「世波険しき処、虚舟を泛ぶ」ような、売茶翁は気ままに「世を遨遊する」ことを理想としているが、それを実践しているのは、「堋口路頭」での茶であり、売茶翁自身はこれを真の「千古の趣」

としているのである。

後半では、売茶翁は自らの売茶行為を「端無く分に随い舗席を開く」と表現し、固定した場所を持つものではなく、「堺口路頭」のような風雅な場所で、絶えず気ままに茶店を開いたことを示しており、これもまた売茶翁の「世を遨遊する」現れでもあった。

四句目の「是れ我れ由来賈を待つ人」という句では、孔子が自分を評価してくれる人物がいるなら、いつでも仕官しようと表わした言葉を用いることで、売茶翁自身が何も茶をもったいぶっているわけではないことを示している。『江戸漢詩選第五巻僧門』においては、「茶を買う客を待つ人の意で、同時に自分の真価をわかってくれる人を待っているという意をこめる」と解釈しているが、売茶翁に至っては「自分の真価」を分かってくれる人より、「自分の茶の真意」を分かってくれる人こそ待っていたのではないかと思われる。

3、終わりに

本稿は売茶翁が禅僧をやめ、京都で煎茶を売り始めた頃に書かれた「売茶口占十二首」を中国古典に基づいて丹念に出典を調べたものである。この中国古典の出典に依る方法は、これまで部分的にはなされていたが、仏教典の影響によるものが多く看過されがちな傾向にあった。事実、先行研究の大半は、福山暁菴の注や碧巌録に出典を求めていたことからも明らかである。

これまでの先行研究において、売茶翁の売茶行為は禅の修行の一環として位置付けられており、実際に「売茶口占十二首」においても、当時の抹茶に対する批判や、茶禅についての内容は数多く見られた。しかし、これらの詩を深く考察した際に、売茶翁がそれまでの僧侶の修行を続けることを敢えて捨て、寺から俗世間に入ることで、「卑しい」とされた売茶の老翁となり、京都の「紫陌紅塵」で「大隠隠朝市」の「陸沈者」として生きることを表明したことが明らかとなった。

そして、売茶翁は世間的に「無用」とされる自分の茶こそが「真の有用」の茶であり、この茶を通して、栄耀と恥辱、富貴と貧窮、是と非といった、世間の一般的な価値観に束縛されることなく、あらゆるものに対して執着する心、つまり「執心」を無くし、世俗に交じりながらも、「虚舟」のように、自由自在に物化の世界で敖遊するという、荘子が至高とする生き方に至ることができると強く主張したのである。

また、「風顚」については従来の研究では、売茶翁の理想と位置づけられてきたが、売茶翁の詩を分析する事によって、「風顚」は理想よりも単に形式的なものであり、売茶翁はこういった形式的な修行によって、『荘子』における「世を遨遊する」ような最高な人の生き方を実践しているのであり、「世波険しき処、虚舟を泛ぶ」ことこそが、売茶翁の理想であり、売茶翁が目指している最高の精神的境地であったことを検証できた。

注

1 伴蒿蹊（1733-1806年）により1790年に著され、様々な人物の生活像を描いた五巻からなる人物伝。
2 現在の佐賀県佐賀市蓮池町、佐賀鍋島藩の支藩として蓮池鍋島藩が置かれていた。
3 『売茶翁集成―遺品・遺墨・偈語・伝記―』主婦の友社　1975年　P136
4 大潮元皓は、黄檗宗の僧、俗姓は浦郷である。道号が大潮であり、月枝・魯寮・西溟・泉石陳人とも号した。肥前伊万里の出身で、売茶翁と同じ龍津寺の化霖禅師に師事した。
5 「窮」については、第五首の「貧」の説明の部分を参考。
6 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P34
7 同上
8 同上
9 森三樹三郎訳注『荘子　内篇』中央公論社　1974年　P186
10 福永光司『荘子　内篇』新訂　中国古典選　第7巻　朝日新聞社　1966年　P287
11 森三樹三郎訳注『荘子　内篇』中央公論社　1974年　P186-187
12 秋月龍珉『臨済録　禅の語録10』筑摩書房　1972年　P23
13 『唯識論』ともいう。中国の唐代に玄奘が漢訳した唯識の論典。日本へも早くに伝わる仏教典の一つ。
14 福山暁菴『賣茶翁』其中堂　1936年　P9。1962年、其中堂によって出版された『賣茶翁』も、詩偈の注は福山暁菴氏によるもので、内容はほとんど同じため、ここで省略する。
15 福山暁菴『賣茶翁』其中堂　1936年　P9
16 大槻幹郎『売茶翁偈語　訳注』全日本煎茶道連盟

2013年　P25
17 森三樹三郎訳注『荘子　内篇』中央公論社　1974年　P77
18 秋月龍珉『趙州録　禅の語録11』筑摩書房　1972年　P363
19 福山暁菴『賣茶翁』其中堂　1934年　P7
20 中国の仏教書。宋の禅僧・圜悟克勤によって編されたのである。
21 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P36
22 金谷治訳注『荘子 第一冊内篇』岩波書店　1971年　P38
23 福永光司『荘子　内篇』新訂　中国古典選　第７巻　朝日新聞社　1966年　P28
24 宋・道原により編纂され、数多くの禅僧の伝記が収録されている。
25 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』では「仏教語の渇愛（渇えたような愛欲の心）の意をかける」（P36）と解釈されている。
26 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P37
27 金谷治訳注『荘子 第三冊外篇・雑篇』岩波書店　1971年　P91-92
28 福永光司『荘子　外篇・下』 中国古典選　15　朝日新聞社　1978年　P97
29 金谷治訳注『荘子 第四冊雑篇』岩波書店　1971年　P73
30 孔子と顔回の人生観。『文子・上仁』に「聖人安貧楽道、不以欲傷生、不以利累己」とある。
31 原文は「况又謂吾兄他日必為箇風顛、莫問所往、若於第五橋下。」である。
32 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P38
33 福山暁菴『賣茶翁』其中堂　1934年　P7
34 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P39
35 大槻幹郎『売茶翁偈語　訳注』全日本煎茶道連盟　2013年　P29
36 金谷治訳注『荘子 第四冊雑篇』岩波書店　1971年　P170
37 福永光司『荘子　雑篇』 中国古典選　17　朝日新聞社　1978年　P150
38『荘子・山木篇』の句であり、原文は「人能虚己以遊世」である。
39『和漢三才図会』にも天照が鳳凰の姿で降臨したとある。
40 福山暁菴『賣茶翁』其中堂　1934年　P8
41 主婦の友社『売茶翁集成』1975年　P138
42 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P39-40
43 大槻幹郎『売茶翁偈語　訳注』全日本煎茶道連盟　2013年　P30
44 同上　P57
45 ともに茶を粉末にして用いることから、団茶から抹茶が発生したとも言われる。
46 福山暁菴『賣茶翁』其中堂　1934年　P8
47 出典は『荘子・徐無鬼篇』、賢者のこと。
48 金谷治訳注『荘子 第三冊外篇・雑篇』岩波書店　1971年　P295
49 同上　P296
50 原文は中国語「順応機縁、任其自然。」であり、ここは筆者の訳である。
51 普化：唐代の禅僧で臨済録に登場する風狂な人物。日本の禅宗、普化宗の始祖とされる。
52 福山暁菴『賣茶翁』其中堂　1936年　P8
53 大典禅師 (1719-1801年) によるもの。売茶翁についての最初の伝記、その記述は売茶翁研究における基礎資料となっている。
54 現在の福岡県糸島市雷山。
55 売茶翁は第七首に「陸沈城市恣癡頑」とある。
56 売茶翁の第七首の説明を参考。
57 福山暁菴『賣茶翁』1934年　P9
58 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P45
大槻幹郎『売茶翁偈語　訳注』全日本煎茶道連盟　2013年　P37
59 福山暁菴『賣茶翁』1934年　P9
60 福山暁菴『賣茶翁』1934年　P9
61 中国宋代の仏教書。『仏果圜悟禅師碧厳録』ともいい、圜悟禅師により編された、全十巻ある。
62 中国宋代の仏教書、禅宗の灯史である。『景徳傳燈録』、『天聖広燈録』、『建中靖国続燈録』、『聯燈會要』、『嘉泰普燈録』の五燈から編集された。
63 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P46-47
64 大潮の十首目に詳しく説明がある。
65 金谷治は「無端の紀」について「端なく連続循環する万物変化の中心」としている。
66 金谷治訳注『荘子 第三冊外篇・雑篇』岩波書店　1971年　P35
67 金谷治訳注『荘子 第三冊外篇・雑篇』岩波書店　1971年　P117
68 金谷治訳注『荘子 第二冊外篇』岩波書店　1971年　P91
69 福山暁菴『賣茶翁』1934年　P10
70 末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P48
71 大槻幹郎『売茶翁偈語　訳注』全日本煎茶道連盟　2013年　P41